



追手門学院大学附属図書館 宮本輝ミュージアム

2008年、学校法人追手門学院は創立120周年を迎えました。「宮本輝ミュージアム」は、学院の創立120周年事業の一環として、2005年5月、追手門学院大学附属図書館を改修し、開設しました。「宮本輝ミュージアム」では本学第一期卒業生で、作家として活躍する宮本輝氏の愛用品、直筆原稿などを常設展示しています。また、作品の世界を取り上げた企画展を開催し、広く一般の方へも公開しています。

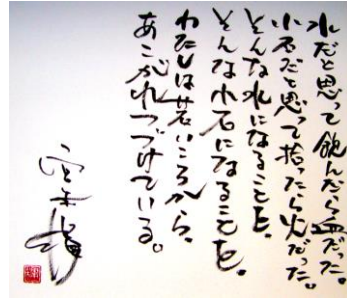
宮本輝氏の著作を通して、学生及び市民の皆様にご感動と共感の場を提供できれば幸いです。

宮本輝ミュージアム展示品リスト

【東側】

◎年譜

◎自筆の詩（ガラス板）



《年譜下ガラスケース》

●広辞苑 ●インクと万年筆 ●直筆原稿（複製）「生きものたちの部屋（3）『インクと万年筆』」

●湯のみ ●懐中時計（芥川賞正賞） ●グラス ●小物入れのかご ●水差し ●墨、筆

●硯 ●自筆の書「正直であるということの凄さ」（複製）

○追手門学院大学第一期生卒業記念アルバム（在学中の写真）・第二期生卒業記念アルバム（茨木学舎全景）

○追手門学院大学三十年史 「創立三十周年を祝して（宮本輝）」

○読売新聞記事 昭和57年（1982）7月26日（月）夕刊 1面・3面 パネル

【北側・展示架】

①作家活動のはじまり

1977年デビュー作「泥の河」と「螢川」を相次いで『文芸展望』に発表。「泥の河」で第13回太宰治賞、「螢川」で第78回芥川龍之介賞を受賞した。この2作は1978年に発表された「道頓堀川」とともに「川三部作」として著者の代表作となった。

『螢川』『道頓堀川』『川三部作 泥の河 螢川 道頓堀川』『幻の光』『星々の悲しみ』

②初期の作品

芥川賞受賞後、肺結核を発病し、約2年間の療養を余儀なくされた。復帰後、旺盛な創作活動が開始される。

『ドナウの旅人（上・下）』 『錦繡』と冒頭部分原稿（複製）

③初めての海外取材

1982年「ドナウの旅人」執筆取材のため、ドナウ川流域を訪問。以後、毎年のようにヨーロッパ諸国へ取材旅行。

『異国の窓から』

④映画化された代表作

1982年「泥の河」が小栗康平監督によって映画化され、モスクワ国際映画賞銀賞ほかを受賞した。

以後、多くの作品が映画化、ドラマ化されている。

「優駿」競走馬の世界を描いた作品で、日本中央競馬会から第一回馬事文化賞を受賞。

1987年に吉川英治文学賞を受賞し、1988年映画化された。

『優駿（上・下）』 映画『優駿』DVDと映画パンフレット 映画『幻の光』 ビデオ

⑤海外を舞台にした作品

『愉楽の園』 タイを舞台にした作品。著者が最初に書いた小説「弾道」が作品の原型となっている。

⑥青春時代を描いた作品

『青が散る』と連載第1回冒頭部分原稿（複製） 新設大学に入学した椎名燎平はテニスコートのないテニス部に所属する。燎平の恋や友情、青春をテニスとともに描いた作品。

『春の夢』『二十歳の火影』

⑦“父と子”を描くライフワーク『流転の海』

敗戦後の昭和22年、50歳で長男を得た松坂熊吾の半生を描く大河小説。1982年著者35歳の年に執筆が開始された。当初は全五部作の予定だったが徐々に延び、現在は全九部作となる予定である。

連載第1回冒頭部分原稿（複製）と『流転の海 第一部』（福武書店）

第一部『流転の海』 第二部『地の星』 第三部『血脈の火』 第四部『天の夜曲』 第五部『花の回廊』

第六部『慈雨の音』 第七部『満月の道』 第八部『長流の畔』 第九部『野の春』（新潮社）

⑧青春と読書

13歳の日、井上靖著『あすなろ物語』を読んで以後、読書に耽溺した。本や小説は、波間にただよう小舟のような、14歳から18歳までのよるべない時代の支えのような存在であったらう。

『本をつんだ小舟』思い出の作品と読書体験を記した作品。宮本輝編集のアンソロジー集

⑨『川三部作』

筑摩書房 1985年刊。限定200部中の第187番

⑩作家 宮本輝を知る本

『新潮四月臨時増刊 宮本輝』新潮社 1999年4月刊

⑪「優駿」

連載第1回冒頭部分原稿（複製）

⑫海外に翻訳された作品

1986年の『泥の河』中国語版発行以後、中国語、フランス語、英語、ハンガール語、ロシア語などへの翻訳書が多数刊行されている。

『彗星物語（上・下）』（原書 角川書店1992年刊）とハンガール語版（Koreaone Press1993年刊）
訳者は金賢姫

⑬恋愛をテーマにした作品

『私たちが好きだったこと』

⑭「ドナウの旅人」以降の新聞連載（１）

- 『花の降る午後』角川書店 1988年刊（1985年7月～1986年2月『新潟日報』等に連載）
『海岸列車（上・下）』毎日新聞社 1989年刊（1988年1月～1989年2月『毎日新聞』連載）
『ここに地終わり海始まる』講談社 1991年刊（1990年3月～11月『福島民友』等に連載）

⑮「ドナウの旅人」以降の新聞連載（２）

- 『朝の歎び（上・下）』講談社 1994年刊（1992年9月～1993年10月『日本経済新聞』連載）
『人間の幸福』幻冬舎 1995年刊（1994年5月～1995年1月、『産経新聞』連載）
『草原の椅子（上・下）』毎日新聞社 1999年刊（1997年12月～1998年12月『毎日新聞』連載）
『約束の冬（上・下）』改訂版文藝春秋 2004年刊（初版2003年刊）（2000年10月～2001年10月『産経新聞』連載）

⑯阪神淡路大震災後の作品

作家自身もこの大震災によって被災した。震災の渦中、日々増大していく被害は、連載終盤を迎えていた『人間の幸福』最終章にも影響を与えた。

『森のなかの海（上・下）』震災当日の朝から始まる物語

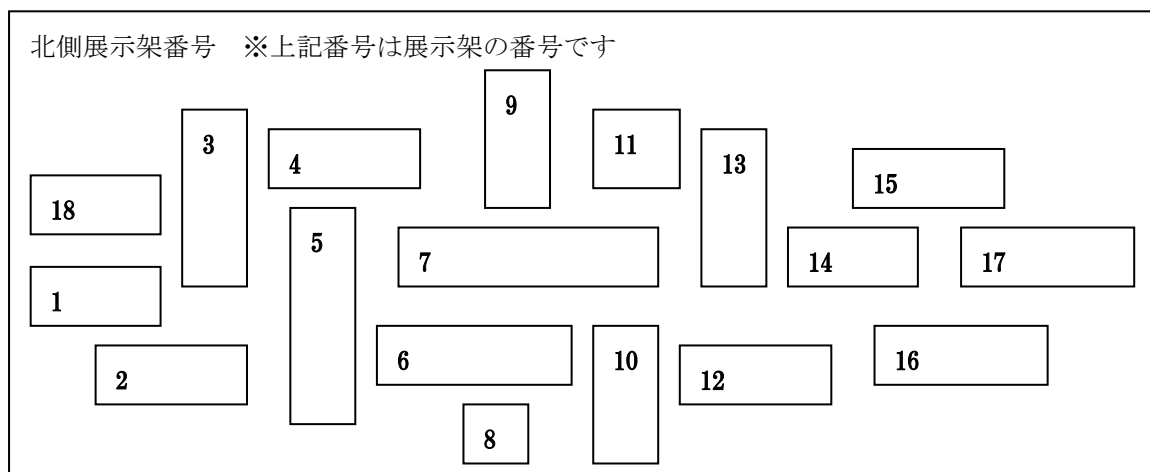
⑰シルクロードへの旅

1995年5月、約1700年前に膨大な經典の漢語訳をなした鳩摩羅什クマラジユウの足跡を辿る40日間にわたるシルクロードの旅に出た。『ひとたびはボプラに臥す』旅の紀行文集

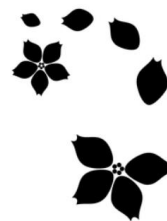
『星宿海への道』 『胸の香り』シルクロードの旅に題材をとった短編「道に舞う」を収録。

⑱2005年ミュージアム開設以後の発表作品

- 『にぎやかな天地（上・下）』中央公論新社 2005年刊（2004年5月～2005年7月『読売新聞』連載）
『骸骨ビルの庭（上・下）』講談社 2009年刊（2006年6月～2009年2月『群像』連載）
『三千枚の金貨（上・下）』光文社 2010年刊（2006年4月～2009年8月『BRIO』連載）
『三十光年の星たち（上・下）』毎日新聞社 2011年刊（2010年1月～2010年12月『毎日新聞』連載）
『水のかたち（上・下）』集英社 2012年刊（2007年10月～2012年7月『éclat』連載）
『田園発港行き自転車（上・下）』集英社 2015年刊（2012年1月～2014年11月『北日本新聞』連載）
『草花たちの静かな誓い』集英社 2016年刊（学芸通信社の配信により2014年3月～2016年8月の期間、順次連載）
『灯台からの響き』集英社 2020年刊（北日本新聞社の配信により2019年2月～2020年1月の期間、順次連載）
『よき時を思う』集英社 2023年刊（2021年1月～2022年10月『すばる』連載）

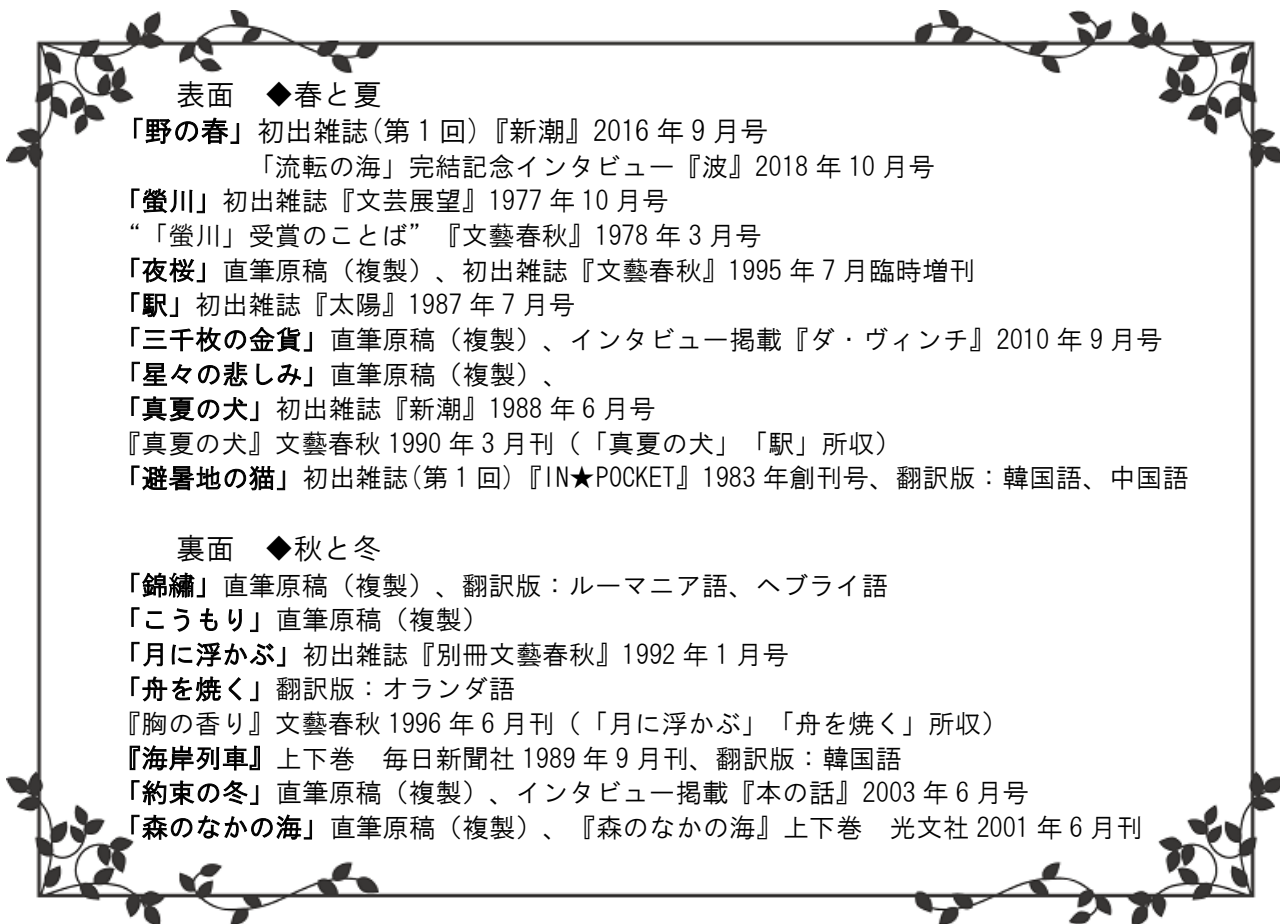


「宮本輝文学 四季のいろどり」展



■ タペストリー

- 「野の春」 “満開の桜が咲く道”
- 「錦繡」 “往復書簡タペストリー「ことばを紡いだ十四通の手紙」”



表面 ◆春と夏

「野の春」初出雑誌(第1回)『新潮』2016年9月号
「流転の海」完結記念インタビュー『波』2018年10月号
「螢川」初出雑誌『文芸展望』1977年10月号
“「螢川」受賞のことば”『文藝春秋』1978年3月号
「夜桜」直筆原稿(複製)、初出雑誌『文藝春秋』1995年7月臨時増刊
「駅」初出雑誌『太陽』1987年7月号
「三千枚の金貨」直筆原稿(複製)、インタビュー掲載『ダ・ヴィンチ』2010年9月号
「星々の悲しみ」直筆原稿(複製)、
「真夏の犬」初出雑誌『新潮』1988年6月号
『真夏の犬』文藝春秋1990年3月刊(「真夏の犬」「駅」所収)
「避暑地の猫」初出雑誌(第1回)『IN★POCKET』1983年創刊号、翻訳版：韓国語、中国語

裏面 ◆秋と冬

「錦繡」直筆原稿(複製)、翻訳版：ルーマニア語、ヘブライ語
「こうもり」直筆原稿(複製)
「月に浮かぶ」初出雑誌『別冊文藝春秋』1992年1月号
「舟を焼く」翻訳版：オランダ語
『胸の香り』文藝春秋1996年6月刊(「月に浮かぶ」「舟を焼く」所収)
『海岸列車』上下巻 毎日新聞社1989年9月刊、翻訳版：韓国語
「約束の冬」直筆原稿(複製)、インタビュー掲載『本の話』2003年6月号
「森のなかの海」直筆原稿(複製)、『森のなかの海』上下巻 光文社2001年6月刊

■ シンボル展示 四季の場面

春：パネル「疾走する馬(桜)」
夏：名言バナー「田園発 港行き自転車」「螢川」
秋：展示「紅葉が散る風景」
冬：パネル「雪の結晶」

■ パネル

- 「野の春」作品紹介
- 「螢川」作品紹介
- 「星々の悲しみ」作品紹介
- 「田園発 港行き自転車」作品紹介
- 「錦繡」作品紹介
- 「錦繡」にまつわる一問一答
- 「約束の冬」作品紹介



■ 名言バナー

- 「螢川」(春)、「星々の悲しみ」(夏)、「錦繡」(秋)、「海岸列車」(冬)

